シリーズ昭和の最強軍団

ロッキード事件

政界も恐れる「伝説の検事」が作り上げた豪腕捜査集団

田中角栄を追い詰めた東京地検特捜部「吉永軍団」

田中を挙げた吉永検事。上写真は逮捕された田中

戦後最大の疑獄と呼ばれるロッキード事件。前首相・田中角栄を逮捕した東京地検特捜部は、陣頭指揮を執ったカリスマ検事・吉永祐介（2013年没、享年81）と、そのもとに集った精鋭たちによるチーム力で捜査の難題を次々に突破した。史上最強の検察軍団の軌跡を辿る。

傑出した指揮官

身長160㎝と小柄な体躯に、牛乳瓶の底のような眼鏡。分厚い眼鏡の奥から睨まれると、思わず身が竦むような威圧感がある――。

この男こそ、田中角栄を追い詰めた伝説の検事、吉永祐介である。

76年2月、アメリカ上院外交委員会で、ロッキード社が全日空への航空機売り込みに30億円以上の不正工作資金を使ったとの証言がなされた。降ってわいた疑惑の中心にいたのが田中角栄前首相

丸紅社長を落とした右腕検事から米司法省に赴いた資料課事務官まで「今太閤」に手錠をかけた特捜部の執念

2022.9.2
週刊ポスト

2019年の夏、大船渡高校の32歳の若き監督はなぜ佐々木朗希の「登板回避」を決断できたのか？

甲子園と令和の怪物

柳川悠二

●定価946円（税込）
小学館新書

だ。「今太閤」と称されて権力の中枢にいた前首相は、全日空に口利きして5億円を収賄したとして追及される。

マスコミは田中の疑惑を連日報じ、「逮捕せよ」との世論は高まった。

昭和最大の疑獄の陣頭指揮を執り、田中を逮捕に追いやった吉永の素顔は今ではあまり知られていない。

吉永は1932年、岡山県で4人姉弟の長男として生まれた。地元で勉学に勤しみ、岡山大学法文学部へ進むと在学中に司法試験に合格。55年、大学を1年早く卒業してすぐ検事になった。東大卒、京大卒が多い検察官の中で異色の存在だった。

64年に東京地検特捜部に配属された後、法務省への出向を経て75年に特捜部へ舞い戻り、43歳で特捜部副部長となる。

吉永と終生にわたり40年近く交流した元毎日新聞記者の高尾義彦氏が語る。

「吉永さんは特捜部の礎を築き、〝特捜の鬼〟と呼ばれた河井信太郎氏の薫陶を受けた。誘導尋問をせず、丁寧に供述を取り、地べたを這うように証拠を集める王道の捜査スタイルを突き詰めていました。出世のため政治家に忖度することなく、汚れ仕事も厭わず事件の解明に全力を尽くす人です。

また、部下の検事だけでなく、新聞記者にも厳しく接する人でした。それは吉永さんが事件解決を最優先に考えているから。捜査の邪魔になる記事が出ると激怒して、記事を書いた記者を出入り禁止にすることも多かった。駆け出しの検察担当だった私は、吉永さんの逆鱗に触れないようビクビクしていましたね」

当時、東京地検特捜部で吉永を間近で見ていた弁護士の堀田力氏は「吉永さんは特捜部の中でもエリート中のエリートだった」と語る。

「捜査の指揮官としては最高の力量を持っていて、ロッキード事件を総括して指揮する能力では右に出る人はいない傑出した指揮官でした。事件を解明しなければという責任感が強く、どんなに厳しい問題でも投げないし引かない。大胆ですが証拠集めには慎重で、〝石橋を叩いて渡る〟を地で行く人だった。常に先を読む厳格な検事でした」

吉永には独自のルールがあった。

「検事同士の打ち合わせは厳禁でした。間違った自白に合わせて共犯者の供述を取ると判決が無罪になってしまうかもしれない。常にそういったリスクヘッジもして厳正に捜査を進めていました」（堀田氏）

周囲は吉永に一目置き、検察内で「特捜部の事件はあいつに任せておけば安心」と言われるまでになった。

そんな吉永のもとに精鋭たちが集った。

実力主義の叩き上げ集団

ロッキード事件前夜、特捜部は暗黒の時代を迎えていた。

「特捜部は68年に日本通運が起こした汚職事件で社会党の議員を逮捕しましたが、そこから8年にわたって国会議員の疑獄事件を扱わない『空白の時代』が続きました。74年には田中角栄の金脈問題が浮上しましたが、特捜部は田中を追い詰められなかった。吉永さんは忸怩たる思いを抱えていたと思います」（高尾氏）

そんな最中の76年2月、前述のようにアメリカの公聴会で爆弾証言が飛び出した。

「空白の8年の後にアメリカから飛び込んできた情報は、航空機をめぐる一大疑獄となる可能性があり、吉永さんは特捜部の存在意義をかけて捜査に臨みました。しかしロッキード事件は容疑の多くが時効間近で、アメリカでは日本の捜査権限が及ばないなど、捜査を進めるうえで様々な壁があった」（同前）

苦難の捜査において獅子奮迅の活躍をしたのが「吉永軍団」の面々だ。

高尾氏が続ける。

「今でこそ東京地検特捜部はエリートの集まりというイメージですが、当時は難解な

田中角栄を追い詰めた 東京地検特捜部「吉永軍団」

各紙が田中逮捕の号外を出した

事件を泥臭く捜査する職人集団で、学歴など関係なく完全に実力主義の部署でした」

その特捜部で精鋭たちを束ねるのが吉永だった。「様々な個性を持つ部下がそれぞれの長所を最大限発揮できるよう、30人ほどのチームを適材適所で配置しました。集ったのは吉永さんの厳しい要求に応えられるタフな面々ばかり。彼らが優秀だったからこそ、前首相の逮捕・起訴という偉業を成し遂げられた。

吉永さんは優秀な部下が集めてきた材料をもとに頭の中で緻密な計算をし、法律を駆使して捜査の壁を突破していったのです」（高尾氏）

精鋭揃いの中でもキーマンとなったのが事件前まで横浜地検にいた安保憲治検事だ。

「被疑者を落とす能力を見込んだ吉永さんが自ら自宅に足を運んで説得し、チームに招集しました。安保さんは〝ボス〟の期待に応え、事件の重要人物である丸紅の檜山廣社長から見事に自供を引き出しています」（同前）

当時の特捜部の取調室。「インテリのエリートに何がわかるのか！」

そう声を荒げる檜山氏に対し、安保検事はこう語りかけた。

「自分は秋田の農家の生まれで、貧しい生活の中で苦学したんです……」

高尾氏が指摘する。

「大企業の社長を相手にした安保さんは、相手のプライドを傷つけないよう注意しつつ、自身の身の上話などをして少しずつ心を開かせる。その態度に感銘した檜山社長は、田中角栄への5億円贈賄の供述を始めたんです」

重要人物である丸紅の役員2人に自供させた〝落としの村田〟こと村田恒検事と若手ながら頭脳明晰と評価され、のちに検事総長になった松尾邦弘検事の活躍も光り、捜査は大きく前進した。

極秘渡米した部下

68年に日通事件の捜査にも関わった松田昇検事を「ミスター検察」と高尾氏は評する。田中角栄に次ぐ大物の首を取った。

「苦学しながら中央大学法学部を卒業し、検事になった。非常にまじめな人柄を吉永さんが買って重要な役割を任せました。松田検事は事件の最重要人物である児玉誉士夫氏の尋問を担当しています」（高尾氏）

児玉は政界のフィクサーと言われ、検察が長年追いかけてきた人物。児玉の首取りは〝大将首〟への大きな足がかりとなった。

捜査の中で最大の難問となったのは、アメリカの司法省が捜査協力するか否かだった。協力がなければ捜査は進展しない。

そこで極秘に渡米したのが前出の堀田氏だ。

長い交渉の末、米司法省と協力関係を築いた若き日の堀田氏は、アメリカの公聴会で賄賂を証言したロッキード社のコーチャン元社長らを尋問するために奔走した。

「捜査権のない日本の検察の代わりに米司法省がコーチャン氏らを尋問する『嘱託尋問』の約束を取り付けたものの、ロッキード側の有能な弁護士が激しく抵抗し、尋問は違法との申し立てを連発しました。最終的には日本の最高裁判所が証人の刑事免責を保証することで、コーチャン氏らの尋問にこぎ着けました」（堀田氏）

ロッキード社から丸紅を通じて、田中に5億円が渡ったことを認めたコーチャン氏らの調書は、田中逮捕への大きな推進力となった。

この時、留学経験を買われて渡米し、米司法省が収集した資料を朝から晩まで読みふけっていた特捜部の検事が、のちにテレビのコメンテーターとしても活躍する河上和雄氏。プライベートでも歌手の千葉紘子（77）と結婚して世間を賑わしたあの河上氏も吉永軍団精鋭の一角だったのだ。

「田中角栄検挙」の偉業を支えた吉永軍団の精鋭たち（右から松田、河上、堀田）

『週刊ポスト』次号（9月9日号）は8月29日（月）発売です
一部地域で発売日が異なります

13歳～15歳の脳は、不安定で制御不能なホルモン装置。
この時期の親子関係が一生を決める！
思春期のトリセツ
黒川伊保子
●定価946円(税込)
小学館新書
(トリセツシリーズ)100万部突破!!

資料課の手柄

〝縁の下の力持ち〟である事務官も優秀な人材が集った。

「中でも有名なのが、特捜部資料課の田山太市郎さんと水野光昭さんです。資料課の事務官は膨大な証拠を整理し、検事と二人三脚で捜査を進めるので、優秀でないと務まらない。

両名は米司法省の資料を受け取るという超重要任務でアメリカに派遣されました」（高尾氏）

アメリカからの資料を日本に運び込んだ水野（中央）と田山（中央右）

吉永のもと、総力を結集したチームはついに待望の日を迎える。

「今から田中を逮捕する。松田君が田中宅に入った」

アメリカ滞在中の堀田氏に吉永から電話が入ったのは76年7月27日午前6時半（日本時間）。

この日、松田と事務官の田山、水野は東京・目白の田中邸を極秘裏に訪問しており、任意同行を求めたうえで逮捕状を執行した。

この逮捕は吉永の慧眼がもたらしたものだと高尾氏が指摘する。

「普通ならこのような大事件は国会議員や官僚、秘書など周囲の人間から攻めていきます。ところが吉永さん率いる特捜部は最初から田中角栄に狙いを定めて、一気に逮捕まで持っていった。いわば頂上決戦という斬新な捜査手法が特捜部の歴史に残る成果に結びつきました」

大手柄を挙げた吉永は93年12月、第18代検事総長に就任した。旧帝国大学出身以外で検察のトップに上り詰めた、初の検事総長だった。

ジャーナリストの田原総一朗氏が語る。

「田中陣営の弁護士に話を聞いたのですが、詳細な調査の結果、検察の主張には齟齬もあったようです。特に合計4回あった現金の受け渡しは、曖昧な点が多い。

今なお、あの逮捕劇には議論もありますが、それでも逮捕まで持っていく〝豪腕ぶり〟が当時の東京地検特捜部にはあったのでしょう」

吉永の功績は組織の地位も変えた。

元東京地検特捜部副部長で弁護士の若狭勝氏が言う。

「ロッキード事件を機に世間の特捜部への評価はガラリと変わりました。例えば、『明日、上場企業の役員の取り調べをしたい』と特捜部が言えば、その役員は海外出張していてもとんぼ帰りする。あの田中角栄を逮捕したことで、特捜部は大企業から見ても脅威になった。特捜部と政治家の関係にも変化が生まれ、ロッキード事件後からリクルート事件（1988年）の頃までは、特捜部は特に政治家に対して強かったと思います」

特捜部のブランドが確立したことで、仕事は苛烈を極めたという。

「世間の期待の高さもありますからね。私が在籍していた頃は土日関係なく地道かつ綿密に捜査し、1年のうち、休日は10日ない程。日々のプレッシャーで肝臓が悪くなりました。通算6年ほど在籍しましたが、特捜部を離れると肝臓の数値が良くなるんです（笑）。それほど多忙な部署でした」（若狭氏）

政治権力に屈しない、自分の芯を貫く強さのある人物が吉永のもとに集い打ち立てた金字塔。それがロッキード事件だったと高尾氏は語る。

「検察トップに上り詰めた吉永さんだけでなく、のちに検事総長になった松尾検事などロッキードの捜査に当たった多くの検事が出世しました」

吉永は13年6月、肺炎のため鬼籍に入った。

若狭氏が言う。

「近年は力を持った大物政治家に対して、検察は及び腰になっている。森友問題でも結局、誰も処分されませんでしたよね。こんな時代だからこそ、権力を恐れることなく事件解明に突き進んでいた吉永軍団のスピリットが必要とされているのではないかと思います」

巨悪を眠らせるな――そんなカリスマの号令が令和の特捜部にも届いているのだろうか。